

武田泰淳著『信念』小考

—— 「信念」という言葉をめぐって ——

A study on the Shinnen [belief] by TAKEDA Taijun [武田泰淳]

—— over the word [belief] ——

長田 真紀

OSADA Maki

キーワード：武田泰淳、『信念』、『戦陣訓』、『司馬遷』、占領下

—

だけが、歴史の舞臺に於て、一つの役目をもつことができる。そして役目をもたされた人物として、歴史劇に登場することを許される。¹⁾

『司馬遷』

世界の歴史は政治の歴史である。政治だけが世界をかたちづくる。政治をになふものが世界をになふ。「史記」の意味する政治とは「動かすもの」のことである。世界を動かすものの意味である。歴史の動力となるもの、世界の動力となるもの、それが政治的人間である。政治的人間こそは「史記」の主體をなす存在である。政治的人間は、世界の中心となる。(中略) 政治的人間としてとりあつかはれた人間

武田泰淳が、昭和二十四年(一九四九)六月に発表した『信念』(「オール讀物」特大号 文藝春秋新社発行)は、凱旋することのできなかった將軍の銅像について描いた寓話的短編小説である。これは、武田泰淳が、敗戦後の日本の極めて混乱した時期に、寓話というかたちをとりながら、敗戦直後という特殊な「歴史の舞臺」において繰り広げられた、日本の「政治的人間」達の奇怪な「歴史劇」をも密かに織り込んでいったものである。

敗戦国・日本の屈折した複雑さは、『信念』という作品のもつ多面性に反映されている。そこには、武田泰淳自身の心の大きな振幅が投影されていたし、それはとりもなおさず、敗戦後の多くの日本人の心の振幅であったはずである。

筆者はすでに、拙稿『武田泰淳著『信念』考——占領期の文学としての視座から——』^②において、作品が発表された当時の、アメリカ軍を中心とする連合軍最高司令官総司令部（GHQ General Headquarters）による占領下日本という極めて特殊な時代と社会の様相を鑑みながら、作品執筆の着想のきっかけとなったであろう昭和二十二年（一九四七）七月に行われた、日露戦争の軍神・廣瀨武夫中佐の銅像の撤去という歴史的事項を指摘し、戦後文学としての存在意義について考察した。

また、拙稿『武田泰淳著『信念』考——敗戦後の自己否定 三島由紀夫著『英霊の聲』へと繋がるもの——』^③では、武田泰淳が『信念』に潜ませた、敗戦後の日本および日本人を覆い尽くした自己否定の問題、つまり、昭和二十一年（一九四六）元旦に発布された天皇のいわゆる「人間宣言」に深く関わる複雑な国民感情について考察した。それは三島由紀夫の『英霊の聲』に繋がる問題でもある。

本稿では、それら拙稿に引き続き、『信念』が発表された当時の、敗戦後の癒しがたい傷がまだ疼いていた、その上さらに新たな傷を次々と受けていった日本人が、考えないではいられなかったはずの存在について、先の拙稿一点を補うものとして考察したい。^④

二

第二次世界大戦に惨敗した日本の戦後は、「政治の歴史」もまた連合国側、とりわけGHQの主導によって牽引され展開していく。

その最大の「舞臺」の一つとなったのが、極東国際軍事裁判（東京裁判）である。

天皇の「人間宣言」の詔書が公布された昭和二十一年（一九四六年）一月。同月十九日には、ジョセフ・キナン法律顧問が起草した極東国際軍事裁判所条例が、マッカーサー司令官の名で発令された。これは、戦争犯罪人（A級・平和に対する罪、B級・戦時法規違反の罪、C級・人道に対する罪）を審問、処罰するための裁判所設置を命令するものであった。四月二十六日には条令改定。四月二十九日には、以下のA級戦犯二十八名の起訴状を公表した。^⑤

- ・荒木貞夫（陸軍大将、軍事参謀官、陸相、文相）
あらきさだお
- ・土肥原賢二（陸軍大将、奉天特務機関長）
どひはらけんじ
- ・橋本欣五郎（陸軍大佐、三月事件・十月事件の首謀者）
はしもとけんごろう
- ・畑俊六（元帥、陸相）
はたしゅんろく
- ・平沼騏一郎（枢密院議長、検事総長、右翼団体「国本社」創設者、首相）
ひらぬまき いちろう
- ・広田弘毅（駐ソ大使、首相、外相）
ひろたこうき
- ・星野直樹（満州国國務院総務長官、企画院総裁、東條内閣書記官長）
ほしのなおき
- ・板垣征四郎（陸軍大将、関東軍総参謀長、陸相）
いたがきせいしろう
- ・賀屋興宣（華北の開発社総裁、蔵相）
かや おきのり
- ・木戸幸一（内相、文相、厚相）
きど こういち

- ・木村兵太郎 (陸軍大将、関東軍参謀長、陸軍次官、ビルマ方面司令官)
- ・小磯国昭 (陸軍大将、朝鮮総督、首相)
- ・松井石根 (陸軍大将、中支方面最高司令官)
- ・松岡洋右 (満鉄総裁、外相)
- ・南次郎 (陸軍大将、陸相、朝鮮総督)
- ・武藤章 (陸軍中将、陸軍軍務局長)
- ・永野修身 (陸軍大将、元帥、海相、海軍軍令部総長)
- ・岡敬純 (海軍中将、海軍省軍務局長)
- ・大川周明 (ファシズム主義指導者)
- ・大島浩 (陸軍中将、駐独大使)
- ・佐藤賢了 (陸軍中将、陸軍軍務局長)
- ・重光葵 (駐ソ大使、駐英大使、外相)
- ・嶋田繁太郎 (海軍大将、海相)
- ・白鳥敏夫 (外務省情報部長、駐伊大使)
- ・鈴木貞一 (陸軍中将、国務相、企画院総裁)
- ・東郷茂徳 (駐独大使、駐ソ大使、東條内閣外相)
- ・東條英機 (陸軍大将、開戦時首相、陸相、関東軍参謀長)
- ・梅津美治郎 (陸軍大将、陸軍次官、関東軍司令官、陸軍参謀総長)

そして同年五月三日には、極東国際軍事裁判(東京裁判)が、東京・市ヶ谷の旧陸軍士官学校に設置された法廷において開廷した。

昭和二十三年(一九四八)十一月四日からは判決の言い渡しが始まり、十一月十二日には死刑宣告を含む判決の言い渡しを終了した。

十二月二十三日午前零時に刑が執行。東條英機、広田弘毅、松井石根、土肥原賢二、板垣征四郎、木村兵太郎、武藤章の七名のA級戦犯が絞首刑

となった。「デス・バイ・ハンギング」(death by hanging)である。翌十二月二十四日には未決のA級戦犯容疑者が釈放された。

『信念』が発表された前年末までのところで、日本中が騒然とするこの「歴史劇」が、全国民が、さらには世界中が注視する中で繰り広げられたのである。

武田泰淳が自らの作品に『信念』と命名した時、そして、同時代の少なからぬ読者も『信念』を読みながら想起したのは、「戦陣訓」ならびに東條英機らの「政治的人間」らの存在ではなかっただろうか。

「戦陣訓」は、昭和十六年(一九四一)一月八日、当時陸軍大臣であった東條英機によって示達された。成立にあたつては、昭和十四年(一九三九)に陸軍軍事課長だった岩畔豪雄^{いわはた}の提案により作成が開始。その時の陸軍大臣は板垣征四郎であった。

「戦陣訓」の制定は、日中戦争(当時の呼称は「支那事变」「日華事变」「日支事变」)が拡大路線を図り長期化していく中で、戦場における兵隊の軍紀が非常に乱れ、本来必要のない悪質な暴行や略奪が著しく横行したことによる。

すでに神聖化され軍隊にとって聖典と見なされていた「軍人勅諭」(明治十五年一月四日発布)とともに、陸軍では、厳しい行動規範を示し、戦意を高揚させるものであった。そしてそれは、次第に、戦場の兵隊たちの生と死を強烈に呪縛するものにもなっていたのである。

「戦陣訓」で、とりもおさず名高いのは、「生きて虜囚の辱を受けず」「本訓 其の二」―「第八 名を惜しむ」であるが、「信念」もまた、兵隊達の思考と行動を支配する言葉であった。

先ず、「戦陣訓」の構成を示すと、以下のとおりである。

「序」

「本訓 其の一」

「第一 皇國」

「第二 皇軍」

「第三 軍紀」

「第四 團結」

「第五 協同」

「第六 攻撃精神」

「第七 必勝の信念」

「本訓 其の二」

「第一 敬神」

「第二 孝道」

「第三 敬禮奉措」

「第四 戦友道」

「第五 率先躬行」

「第六 責任」

「第七 死生観」

「第八 名を惜しむ」

「第九 質實剛健」

「第十 清廉潔白」

「本訓 其の三」

「第一 戦陣の戒」(二〇九)

「第二 戦陣の嗜」(二一〇)

「結」

その中で、「本訓 其の一」の「第七 必勝の信念」では、次のように述べられている。

信は力なり。自ら信じ毅然として戦ふ者常に克く勝者たり。

必勝の信念は千磨必死の訓練に生ず。須く寸暇を惜しみ肝膽を碎き、必ず敵に勝つの實力を涵養すべし。

勝敗は皇國の隆替に關す。光輝ある軍の歴史に鑑み、百戦百勝の傳統に對する己の責務を銘肝し、勝たずば斷じて已むべからず。

さらには、以下でも「信念」が謳われている。

戦陣の將兵、宜しく我が國體の本義を體得し、牢固不拔の信念を堅持し、誓つて皇國守護の大任を完遂せんことを期すべし。

(「本訓 其の一」「第一 皇國」)

思想戦は、現代戦の重要な一面なり。皇國に對する不動の信念を以て、敵の宣傳欺瞞を破推するのみならず、進んで皇道の宣布に勉むべし。

(「本訓 其の三」「第一 戦陣の戒」(四))

流言蜚語は信念の弱きに生ず。惑ふこと勿れ、動ずること勿れ。皇軍の實力を確信し、篤く上官を信賴すべし。

(「本訓 其の三」「第一 戦陣の戒」(五))

しかし、当時の國家のリーダーらが、すなわち「政治的人間」達が、「必勝の信念」「牢固不拔の信念」「皇國に對する不動の信念」を説きながら、

夥しい数の若者達を絶望的な「死」に駆り立てていった頃、そして、日本の兵隊達が「戦陣訓」の小冊子を背囊に入れ、死線を彷徨っていた頃、武田泰淳は『司馬遷』で、以下のように書いていたのである。

司馬遷は生き恥さらした男である。士人として普通なら生きながらへる筈のない場合に、この男は生き残った。口惜しい、残念至極、情なや、進退谷まつた、と知りながら、おめく／＼と生きてゐた。

史記的世界は要するに困った世界である。世界を司馬遷のやうに考へるのは、困ったことである。ことに世界の中心を信じられぬ點、現代日本人と全く對立する。中心を信じるか、信じないか、これで兩者永久に相遭へぬこととなる。日本は世界の中心なりと信じてゐる日本人、かつその持續を信じてゐる日本人からすれば、武帝を信じられぬ司馬遷如きは、不忠きはまりない。宮刑では足りぬ、死刑に處しても良いのである。

司馬遷は、史記的世界を創り出したが、その結果、その中心が信じられなくなり、人間不信に陥った。日本人を優秀人間として絶対視してゐる我々からすれば、これは飛んでもない所業である。我々の場合は日本及び日本の中心を信ずることのみが、歴史に参加することになる。それ以外に方途はあり得ない。冷靜に批判などしてゐたのでは、「日本世家」「日本本紀」は危殆に瀕する。空間的に世界を考へると言ふ態度は、行動者の態度ではなく、後から視てゐる傍觀者の態度である。既に批判精神であるから「海行かば」の聲は生れない。

眞珠灣頭少年飛行士の信念を羨むのみである。莞爾として降下す

る彼等の眼底胸中には、史記的世界など影もとどめなかつたであらうから。

武田泰淳は、もはや「世界の中心を信じられ」なくなつた司馬遷を語りながら、そこに自己を仮託しながら、「必勝の信念」「牢固不拔の信念」「皇國に對する不動の信念」など信じられない人間を描いていたのである。^⑦

武田泰淳は、昭和十二年（一九三七）に出征してから、「史記」について考え始めたという。^⑧ 激しい戦地生活を送るうちに、「歴史のきびしさ、世界のきびしさ、つまり現實のきびしさ」を考へる場合に、何かよりどころとなり得るものが、『史記』には有る、と思はれた」という。昭和十四年（一九三九）に復員してからも、「史記」について考え続けたが、「三年間、自分の位置を定めることが、出来なかつた」という。その「低迷徘徊」は、昭和十六年（一九四一）十二月八日まで、つまり開戦の日まで続いたという。そして、一年後の昭和十七年（一九四二）十二月、漸く書き上げるこゝとができたという。『司馬遷』の刊行は、昭和十八年（一九四三）四月である。

日中戦争（支那事変）に召集され実際に二年間の兵隊生活を送つた武田泰淳にとって、「戦陣訓」で鼓舞されたものは、戦地における實際の人間の姿とは実にはかけ離れた空疎なものでしなかつたはずである。

東洋の最古の兵書『孫子』では、戦争の本質、そして軍隊を率いる將軍のあるべき姿について、様々な角度から述べられている。

兵者國之大事 兵とは國の大事なり

死生之地 死生之地

存亡之道 存亡之道

不可不察也 察せざるべからざるなり

(計編 第二)

(戦争とは国家の重大事である。国民の生死が決まる場所であり、国家の存亡の分かれる道であるから、十分に熟考して行わなければならない。)

故兵貴勝 故に兵は勝つことを貴ぶ

不貴久 久しきを貴ばず

故知兵之蔣 故に兵を知るの蔣は

生命之司命 生命の司命

國家安危之主也 國家安危の主なり

(「作戦篇 第二」)

(戦争とは勝つことを重視し、長引くことはよくない。だからこそ、戦争というものをよく知っている将軍は、民の生死を司り、国家の安危を決める者である。)

日本の「政治的人間」達が、「死生之地」「存亡之道」について、熟慮の上に熟慮を重ねて戦争を開始したか。「不貴久」である戦争が、なぜ十五年戦争とも称されるほどずるずると長期化してしまったのか。『司馬遷』の中で『孫子』についても述べている武田泰淳なら思い巡らさなかったはずはない。

そして日本は、「貴勝」どころか惨敗を喫するのである。

三

さて、『信念』には、タイトルとなった「信念」という言葉が、作品中に一度も出て来ない。では、「信念」とはいったい誰にとつての信念なのであろうか。

それは、息子を兵隊にとられた老婆(母親)である。

老婆が息子の生還を祈って毎日仰ぎ見ていた将軍の銅像は、ある日、青年達によって打ち倒される。

悲嘆にくれる老婆は、銅像の土台にしゃがみ込み、そばにいる男が銅像の本人・将軍であることに気づかぬまま、語り始める。

「この方は偉いお人だったのに」

「なにしろ遺骨も公報もあてになりませんで。あてになるのはこの御方だけですから」

「あの方が生きてゐたらつしやれば、俺も生きてるでさ。あの方が死になさつたら、俺も死んでるでさ」

老婆の息子は、将軍の師団に入隊していたのである。そして、戦死公報も遺骨も届いた今となっても、将軍の存在だけに、息子の生還の唯一の希望を懸けているのである。

一方、将軍は、その日から老婆に遇うのを恐れた。そして、「自分の分身」とも言える銅像が、「みじめに、ぶさまであること」を悲しみ、「いつそ堀の中へ落ちてしまへばいいのに」と、人知れず銅像を堀に落そうと努力する。そして、とうとう銅像を堀の底に引きずり落とし沈ませたのだっ

た。

突然、強い力で背を突かれ、彼は前のめりに倒れた。「何ていふことをするだ！ 罰あたり！」あの老婆が怒りに小さな身体をふるはせながら夕闇の中に立つてゐた。「あの御方に對して、何てまねをするだあ、あの御方に……」老婆は彼を呪ひ、彼に向つて唾をはきかけ、泣き叫びながら丘の路を走り降りて行つた。

將軍の銅像を毎日仰ぎ見ることゝ息子の生還を固く信じてきた老婆にとつて、將軍の銅像が青年達によつて引き倒されたことは、悲痛の極みであつた。それどころか、さらに、將軍の存在だけが息子の生還の一縷の希望であると打ち明けた相手の男によつて、銅像はもはや見ることも触ることもできない堀の底へとずり落とされたのである。老婆にとつてのたつたひとつの希望が絶望の淵に落とされたのに等しい。

しかし、泣き叫びながら丘を降りて行つた老婆は、この男こそが將軍であることを最後まで知らない。

国が敗れた今、これから新しい社会と時代を築いていこうと、ついこの前まで国家の英雄であつた將軍の銅像を引き倒した青年達。

老婆から息子の話を聞いた時、自分こそがその師団を指揮した將軍であることができなかった將軍。凱旋できず、自分は生き残り、老婆の息子をはじめ兵隊達は戦死しても、せめて師団の様子を老婆に語つたならば、老婆は悲嘆の中にも、ある種の救いを見つけ出す一步となつたかもしれない。

『孫子』には、理想とする將軍のあるべき姿について、以下のように記されている。

視卒如嬰兒	卒を視ること嬰兒の如し
故可與之赴深谿	故にこれと深谿に赴くべし
視卒如愛子	卒を視ること愛子の如し
故可與之俱死	故にこれと俱に死すべし

（『地形編』第十）

老婆が固く信じていたのは、息子が將軍の師団に入隊したからには、自分に代わつて將軍が「如嬰兒」「如愛子」、息子を見てくれているはずだという、母なるものの一途な思いに尽きたものではなかつただろうか。

青年達のように戦前の權威や体制を否定し、新しい社会や時代を築くべく、前向きに生きていこうと意欲的に進み始めた者達。將軍のように実は敗戦までの過去を引き摺りながら、過去の自分を自ら否定し、本来負うべき責任も捨て去つて行つた者達。

一方で、決して帰ることのない息子を待ち続けている老婆。

老婆の「信念」だけが取り残され、宙を彷徨っているかの如きである。

四

天皇の「人間宣言」では、「新日本ヲ建設スベシ」と謳われた。

極東国際軍事裁判（東京裁判）では、「政治的人間」達のうち、ある者達は消えていき（前述したように）、東條英機ら七名のA級戦犯は絞首台の露と消えた、またある者達は、再び「政治的人間」として生きはじめた。

夥しい数の戦死者達と計り知れない犠牲をはらった大戦争の後、次はGHQによる占領下日本という「政治の歴史」「歴史の舞臺」が確実に動き出していった。

『信念』と同じ昭和二十四年（一九四九）に発表された「勸善懲惡について」^⑨で、武田泰淳は東條英機に言及しながら次のように述べている。

東條はかつて、日本國の最大の強力者でありました。彼は日本國民を支配した絶對者でありました。牢獄の片隅に、または生きのこりの自由主義者の心理のひだの下に、わづかな反抗はありましたが、彼はたしかに戦時中、あたかも自己が最強者であるとともに最善者であるが如くふるまひ得たのであります。そして國民もまた彼がたんなる強者でなく、日本的善なるものの代表者であるかのごとき魔術的印象をうけとつてゐました。自分たちを榮光と幸福へみちびく勇氣りん／＼たる指導者として彼を信じ、或は信じてゐるかの如き興奮状態におち入りました。彼の命令は善であり、その逆は惡であるかのやうでさへありました。イヤ、そのやうな心理法則が存在してゐたと言つてもいいくらいです。そしてもしあの場合、日本が勝ちつづけ、彼がますますその強者ぶりを發揮しつづけたとすれば、その奇妙な心理法則は何のうたがひもなく保存されて行つたにちがひないので、つまり東條的支配力より、更に強力な民主國家の支配が出現して、彼を打ち負かさなかつたならば、その當時の狂信的國民心理にとつて、彼は依然として善そのものの如く存在し得たのです。彼が最善者であるといふ迷信は、彼より強力なるものの出現によつて、ただそれのみによつてはじめて消え去つたのです。ほかの何物でもなく、ただ

それのみによつて……。そして今や全く新しい強力者、第二第三の強力なる絶對者が、善の神と化しつつあります。

善惡を考へる場合、強弱をも考へあはせねばならないといふことは、たとへ一時的現象にしても何となく暗い、悲しげな雰囲気を持つてゐます。

「全く新しい強力者」、「第二第三の強力なる絶對者」、「善の神と化しつつあ」る存在の出現、つまり、早くも新たな信念を有形無形のかたちで強いる存在の出現を、すでに武田泰淳は感知していたと言えよう。

それは、第二第三の「老婆」を誕生させる可能性への予言とも言える。

武田泰淳は、『信念』を決してヒューマニズムの視点で描いたのではない。冷酷非情に展開する「世界の歴史」「政治の歴史」の中で、「銅像」という偶像は必ずやいつも存在し、その「銅像」にそれぞれの「信念」を懸ければ生きていくことのできない者もやはりまた存在するのである。

注

- (1) 東洋思想叢書『司馬遷』昭和十八年四月 日本評論社
- (2) 「上田女子短期大学 紀要」(第四十四号 令和三年一月)
- (3) 上田女子短期大学総合文化研究所「學海」(第七号 令和三年三月)
- (4) 本稿は、先行の拙稿一点と重複する箇所がある。合わせて参照されたい。

(5) 二十八名の階級や職位については、『昭和史全記録』(毎日新聞社 昭

和六十四年三月 370～371頁、『東京裁判』日暮吉延著（講談社現代新書 平成十九年一月 107頁）を参照した。

（9）「表現」（昭和二十四年四月 角川書店）

（6）『東條英機』一ノ瀬俊也著（文春新書 令和二年七月 144頁）に拠る。

（7）昭和二十二年（一九四七）八月から十月にかけて雑誌「進路」に発表され、翌昭和二十三年（一九四八）三月、思索社から刊行された『蝮のすゑ』では、「信念」など持たなくても生きていられる人間の姿が、以下により明確に語られている。

「生きて行くことは案外むづかしくないのかも知れない」

（中略）

「ともかく、みんなかうして生きてゐる以上は」

（中略）

「戦争で敗けようが、國がなくならうが、生きていけることはたしかだな」

私は、かつて上海へ来る前も来てからも、よく勉強し、よく働き、よく考へた。その時、私は誰からも信用されなかった。終戦後、私は勉強もせず、働かず、考へもしなかった。しかし私は今までかつてない程、価値ある人物と化しつつあった。私はもはや理想もなく、信念もなく、只生存してゐた。さういふ私こそ、人々は必要とするらしく見えた。（傍点原文のママ）

（8）以下、『司馬遷』執筆の経緯については、『司馬遷』の「自序」で武田泰淳自らが記していることである。